

第 9 回 熊本城学

中世石造物が語る熊本城築城前のすがた

熊本市文化振興課 美濃口 雅朗

結論

熊本城築城前、茶臼山は中世墓地であった（中世茶臼山墓地と仮称）
 清正は築城時、そこにあった中世墓地の石塔類を転用・廃棄した
 でも…当時としては当たり前、罰当りではなかった

熊本城内の石塔類の現状

硬質石材（安山岩）の板碑は石垣に転用
 軟質石材（凝灰岩）の五輪塔等は石垣には不向き、加重のかからない箇所への転用
 ただし…城内の石造物の殆どは石垣裏込め出土、主に軟質石材（凝灰岩）の五輪塔

肥後の五輪塔

初期のもの（13 世紀代～14 世紀前半）…火輪の軒裏が反る、水輪が橢形（肥後の特徴）
 時期が降るもの（16 世紀）…形態バリエーションが増加、火輪の軒裏の反り弱い・軒口広い

熊本城内の五輪塔の型式と出土傾向

13 世紀後半～14 世紀前半から 16 世紀代（築城直前の型式）まで
 時期が降ると量化する→造立階層が拡大・低層化する（全国的に普遍的な傾向）

城下の石塔類における硬質石材使用の普及

慶長 5 年（1600）没の聖林院墓（安山岩製）を嚆矢とする→熊本城築城期に一致する
 築城（普請）によって硬質石材の加工技術が進展した可能性

熊本城内石塔類の存在要因

城内出土の多量の石塔類は…そこにあった石塔類を転用・廃棄した可能性大
 →近くに良好な石垣石材（安山岩）供給地がある（金峰山）、軟質石材は石垣に向かない

中世茶臼山墓地の認定と景観

「茶臼山ト隈本之絵図」に描かれた墓の位置・城内の石造物の現状位置から…
 中世茶臼山墓地の主な位置は現在の本丸周辺
 多量の石塔類から…石組・石塔からなる集団墓（血縁墓）
 墓地の中心施設である墳墓堂「クワンノン堂」・墓地のシンボル総供養塔を備える
 板碑は個人墓の供養碑、大形の板碑（加藤神社）は一族の仏教儀礼に伴うモニュメント

近世城郭における石塔類の転用

近世城郭において中世石塔類の転用・廃棄は一般的
 →戦国時代までの墓に対する意識…造塔行為自体に意義（死者を供養し仏と結縁する）
 造墓主体である国人領主層の没落（近世社会への転換）→中世墓地の終焉

江戸時代の墓制における儒教の受容

江戸時代の墓制は仏教をベースに儒教が融合（仏式墓＝本来の仏教ではない）
 儒教の採用・普及（封建秩序を維持する、林家の影響）、大名墓は封建階級を可視化させる装置
 埋葬法に「家禮」が実践される（輪廻転生から招魂復魂へ）→厚葬・土葬（遺体を保存）
 熊本城築城期の人々と現代人とは墓に対する感覚が異なる、本来は「そこに私はいません」

